

撥瑣など相當に公刊せらるるも何れも文字の逐録にして寫眞を紹介して居らぬ。編者即ち之を憾とし、茲に標本的ではあるが各々その一部分を寫眞として原本の面影を偲ばしむるよすがと爲したるもの、嘗て此等の原本を見たる人々には故人に遇ふの感を懐かしむる。採録するもの合計六十三種・キャビネ版寫眞八十二葉・古文尙書・毛詩音・禮記注・春秋經傳集解・同穀梁傳集解・論語集解・論語義疏・孝經注・爾雅注・切韻の類より史記・當府君碑・唐永徽令・唐律・唐律疏議・散頒刑部格・天寶六載敦煌縣戶籍・帝王略論・藥方書・冥報記・老子類・无上祕要・關紫錄儀・法句經・大樂涅槃經・出家人受菩薩戒法・大智度論・法華經義記・維摩經義記・十地義疏・法琳別傳・傳法寶紀・一切經音義・梁武帝發願文・楚辭音・敦煌廿詠・文選・文選音・舞譜など四部の書・内外典に互り、先づ第二〇〇號乃至第三五一號間の主なる貴重稀觀書類を網羅してあり、編者の深造博治の學識が自ら躍如たるものがある。本書は寫眞集にして説明文は無けれども、用意周到なる編者のことなれば、恐くは將來何か之に關する論著を追刊せられて我等を啓發しうることに信ずるが、さしあたりは民國の王重民君の巴黎敦煌殘卷錄錄卷一と併せ見れば益を受くること蓋し尠少ならずと考へられる。佛國々立圖書館配屬の寫眞師の技術の拙劣なる爲折角の寫眞が歸朝後殆んど用を爲さざる苦き經驗を營めたる一人なる私は、同君が之に依屬せずしてよく親しく撮影せられ我國にその留眞を齎らし以て學界に寄與せられたる努力と功績とに對し滿腔の敬意を表する者である。(昭和十三年二月

第二十三卷 第二號 三九四  
五日發行、限印壹百部、發所 京都市油小路正面下ル小林寫眞製版所) (那波利貞妄言)

○東亞大陸諸國疆域圖

東方文化學院京都研究所編纂  
理學博士 小川琢治監修

本圖の編纂過程並に資料に就いては、昭和十一年二月發行の「東方學報」京都第六冊に太田喜久雄氏が「中華民國及滿洲國疆域圖製作過程に就て」といふ論文を發表して詳細に述べて居られる。東亞大陸諸國疆域圖とは出版に際して名を變へたものである。東方文化學院京都研究所が創立以來の事業として實に九年の歳月を費して成つた者だけに、資料の正確、體例の整備せる點に於て他に類を見ない。特にアルバース氏式等積多圓雜圖法による嚴密な座標の算出と、廣く日本、支那、西洋で發行された各種の地圖や旅行記を蒐集し比較検討を行つた事とは内外に於ても劃期的な事といへる。支那の如きに於ては全く同一地域を表はした圖にあつても資料の選擇次第で著るしい相違のある事は驚くべき事であつて、前掲太田氏論文中南京の位置の比較圖を見ても思ひ半ばに過ぎる者がある。此の間小川琢治博士監修の下に校正に當られた太田氏、作圖の爲に不斷の努力を拂はれた小野三正氏等の苦心は想像に餘りある。其の上銅版彫刻に當られた齋藤巳代治氏の學術的作品に對する獻身的な努力がなかつたならばかゝる美麗な體裁を整へる事は出来なかつたであらう。支那の地圖帖としては近出の支那地圖學界の傑作といはれる「中華民國新地圖」及び「中國分省

新圖」があり、殊に後者は年々新版が出てゐるので、支那地圖の最も尖端を行く者である。しかし支那及び滿洲國の全疆域を収めた一枚刷の圖としては從來殆んど完全なるものを入れる事が出来なかつた。本圖はかかる需要に應ずるものとしても最適の者といふべく、昨年支那事變の勃發以來頻出せる坊間の支那全圖とは根本的に異なる。四百萬分一の縮尺を採用した事は印刷技術の關係にもよることながら、中華民國及び滿洲國の縣城の分布を漏れなく記載し得ること、圖上の一耗が略々我が國の一里に相當すること等の理由による。殊に後者の如きは地圖の使用上案外の便利を蒙るのである。更に本圖の特色は現在の縣城をもととして、清朝末期にまで遡り府廳州縣の別を圖上に示してゐる點であつて、之に依て當時の行政上の中心、ひいては現在の縣城の廣さや城壁の大きさを察する手掛りともならう。此等の事については、いづれ、近い中に出版される本圖の索引に詳細な説明が附される筈である。支那及び滿洲國に於ては縣城以上を表示することに意を用ひた爲、縣以下の小地名に於ては相當重要なものを併してゐる缺點がないでもない。縣名は民國二十三年が基準となつてゐるが、もとより滿洲國は最近の制により、支那に於ても出来る限り新設の縣が附加されてゐる。しかし脱漏は免れる所ではなく、鐵道はもとより河川に於ても往々にして誤を認める。文字の正確は最も意を用ひたのであるが、之さへ既に幾つかの誤を發見した。此等は是非再版の際に改訂したいと思ふ。(軸製特價六圓、折圖壹圓八拾錢、昭和十二年十一月、東京富山房發行)〔日比野〕

## ○ルネサンス文化の研究

大類 仲

昭和七年に東北大學から雜誌「西洋史研究」が創刊せられて以來既に六年の歲月が經つた。此の六年間ほど吾々が人類博士をば吾が學界の輝やける存在として意識したことはなかつた。博士の年と共に益々若々しい熱情のもとに「日本における西洋史學」が何となく軌道に乗つて來たといふ力強さを感じたものは私一人ではないであらう。戦後における歐洲史學の轉回——それは歐羅巴的危機の地盤における未曾有の轉回であつた——は人類博士といふ鋭いレンズを通して仙臺から全日本に向つて反射されつゝあつたといつても過言ではないであらう。

如何に眞面目に見ても今までの吾が邦の西洋史學には未だ獨立の發展をとげるだけの地盤を缺いてゐる、而も如何に卓れた獨創的研究でもそれが強靱な地盤によつて支へられてゐなければ充分に fruitful であり得ないのである。明治以來數十年の歴史を有する吾が西洋史學が何故に歲月に相應した生長發展をとげないのであらうか、専門家自身が研究上の地理的不便を常套語とするやうでは餘りに無責任すぎるやうに私には思はれる。尠くとも歴史の如き學問が狹隘な翻譯階級の間だけに特權の如く保たれて一般の教養の中に充分に溶解されてゐないといふことは決して健全な状態とは謂はれない。而も之までのやうに學の水準とは凡そ關はるところのない低俗な常識的參考書類が屋上屋を架して出現するの